

小川糸著「さよなら私—恐竜の足跡を追いかけて—」 幻冬舎文庫、幻冬舎 2013年2月10日刊を読む

さよなら私—恐竜の足跡を追いかけて—

1. 「これは、俺の数少ない人生経験から得た教訓だけど」

ナルヤは、丁寧に前置きをした。

2. 「もし自分に行き詰まったら、もっと広い世界に飛び出して、自分よりも上を見るといいんだ。狭い世界でうじうじしていたら、もっと心が狭まってくだらない妄想に取りつかれるだけだもん。自分のことなんか誰も知っちゃいない、屁とも思っていない世界に自ら飛び込めば、自分がいかにちっぽけな存在か、嫌でも思い知らされるよ。そうすれば、開き直って、もっと成長できる。自分に限界を作っているのは、自分自身なんだ」

3. ナルヤは、わかりやすい言葉を選ぶようにして話してくれた。

4. ちょっと前の自分がまさにそうだった。小さな世界で一番になって、喜んでいて。全然大したことじゃないのに、すごく偉いことを成し遂げたような気分になって、自己満足に陥っていた。そして、そのちっぽけな世界で一番じゃなくなった瞬間に、すべての自信を失くしたのだ。

「そうだね」、

ナルヤの言葉が、じんじんと傷口に塩を塗るみたいに胸に響いた。

5. 「二十歳過ぎたら大人になると思っていたけど、実際はまだまだ子供だなあ」

両手を伸ばして投げやりな口調で言うと、ナルヤはそのまま後ろに倒れた。

「気持ちいいから、美咲もやってみろよ」

6. 同じようにナルヤの隣に背中を倒すと、ナルヤの腕がそっと伸びて、腕枕をしてくれる。ちょっと恥ずかしかったけれど、ナルヤの好意をそのまま受け入れることにした。

7. 寝転がると、空しか見えない。地球が丸い形をしているということを体で実感する。その時にふと、大事なことに気がついたような気になった。それを、なんとか言葉にしたいくて、寝転んだまま、独り言のように言った。

「もともとまっすぐな地面なんて、ないんだねえ」

だから、ゲルのベッドが曲がっているのだって、よく考えれば当然のことなのだ。

8. 「ほんと、モンゴルに帰ってくると、それをすごく実感するよ。人間は、道路を真っ平らにならして、建物でもなんでも真っ直ぐな線で作ろうとするけど、自然界には、真っ平らも真っ直ぐも存在しないんだよ。歪^{ゆが}んでいて当然なんだ。日本の、特に東京なんか、ほとんどが人工的な地面だろ。よくここまで几帳面にコンクリートで覆ったものだなあ、って感心しちゃう。それはそれで、人間の技術

が作り上げたものだから、すごいことなんだけど」

9. 「私はそっちの世界の方が当たり前って思ってた。でも、違ったんだね」

言いながら、なぜだか涙が込み上げそうになる。背中の石ころ達のゴツゴツが、妙に愛おしかった。

「こうやって大地にごろんとしていると、恐竜の足音が聞こえてきそうな気がしない？」

「恐竜の足音？」

「うん、日本ではなかなか想像しづらいけど、こっちだと、恐竜が歩いていた頃の大地がさ、剥き出しのまま、まだ残っている気がするんだよね。この場所も、かつて恐竜達が大股でガッシガッシ歩いていたのかなあ、とかって想像すると、恐竜の時代と今が、しっかりと繋がっている気になるんだよ」

「そうかなあ」

私は横向きになって、地面に耳をくっつけた。目を閉じて、恐竜の足音に耳をそばだてる。

P114 ~ 116

[コメント]

主人公の同級生のナルヤとの対話の中に著者の小川糸さんがモンゴルの大草原で感じ、考えたことが素直に表現されている。小川糸、大いに読むべし。

— 2014 年 1 月 4 日 林 明夫記 —